

# 神なき神の世界

増 永 靈 凤

宗教研究の立場と方法とは其の本質把持の實果を決定する。而して右の視點より與へらるる宗教の定義は蓋し益多様化せんとするであらう。暫く西歐の學者が下せる定義を見んに先づ現今之宗教哲學に深き根柢を與へたるヘーゲルの曰く「宗教は有限精神が其の本質に於て無限精神なることを知る事である」と。又シユラエルマツヘルは「宗教とは無限なる者に對する敬虔的なる絕對的依據の感情である」と稱し、ハルトマンに於て(註一)「宗教は生きて働いてゐる一つの實際である。而して其の對象は超絶的な實在であり」ドルネルにあつては「神の行爲に基けるものこそ宗教であつて是を人間の立場より言へば神の事行を愛用することにあり」オイケンに従へば「宗教は獨立なる精神界が人間の心に輝いたといふことであつてそは即ち神の働きであり、且神の意志である」と稱し、ヴィンデルバンの見解によれば「宗教は超絶的生活であり其の眞諦は經驗を超越せる生活、精神的價値の世界に聯繫してゐるといふ意識、經驗的存在に甘ざさる狀態である。」かかる宗教に關する多様なる規定は具体的事實としての宗教の抽象的表現である限り必ずしも普遍必然性を要求し得べきものではない。蓋し宗教に就ての定義が存することによつてのみ宗教なる事實の存在性が確保せらるるものに非ずして宗教なる具体的現實體があつて初めて各視點より定義づけられるからである。

西歐に於ける多くの人々が基督教を最高階位に於ける宗教と自在して居る限り宗教に關する普遍的定義を下さんとする企ては寧ろ無謀であらう。従つて宗教の評價及び人類の宗教意識に於ける發達の程度を定めるには慎重なる態度と方法とを必要とする。ドルネルは佛教を宗教の最下級にハルトマンは中位にシーベックは最高階位に置いたことによつても如何に其の評價が宗教研究の立場と方法とに規定さるかが明瞭であらう。思ふに西歐の多くの學者が下す宗教の定義に於て其の中核をなすものは信仰の對象として實在する神の觀念なるが故に神が全く抜き去られたる佛教の如きを文化的に高級なる宗教と考へざるは寧ろ當然であると言はねばならない。而して神の存在を肯定する基督教に於ては德福一致の保證を與へるべき靈魂の不滅を要請せざるを得ないが佛教は無我論を主張する限り彼等には全く價值低き宗教と考へられるであらう。

けれども客觀的に神を設定せざること及び不滅を要請せらるる靈魂を全く否定することによつて佛教獨自の立場と本領とが指示されてゐるのである。但し佛陀は所謂唯物論者の如く神の存在を絶對に否定したのではなく神の存在を證明する事も否定することも俱に人間能力を超えた形而上學の事項に屬するが故に論理的に歸結して之を否認したのである。佛陀以前並びに當時神の屬性は常一主宰と考へられてゐたがこれらの思想は佛陀の物を流動の相に於て看取する無常觀或は物の相依相關を説く立場よりは當然否認せらるべきである。思ふに正統婆羅門の取れる思想的立場は常一主宰なる梵より(註二)萬象が轉變して來るといふ説である。けれどもかかる形而上學は佛陀の固より取る處ではない。人格的創造神に對する佛陀の否認を馬鳴は其の佛所行讚に於て最も雄辯に詠じてゐる。曰く、現實世界の一切は梵

自在天の所造によるとせば何故にかくも不完全なるものを創造したのであるか。この意味に於て自在天の自在の意義が失はれるであらう。又道德的善惡もその所造に歸せらるるが故に惡事淨行の區別を特に設くる要はない筈である。

かくせば罪惡に對する責任は當然問はれなくなるであらう。自在天が若し創造神なりとせば常に創造しなくてはならないから遂には自ら疲勞するであらう。かくせば彼は決して安樂ではない筈である。現實の苦樂を自ら作るとせば自在天は憎愛の感情を有する極めて不公平の者となるであらう。自在神以外に他の創造者の存在を肯定するならば彼は決して萬物の終局の根據とはならない筈である、云々。

かくの如く佛教は論理の最後の歸結として超經驗的なる創造神を否定したのである。さる代り佛陀は清新にして合理的なる(註三)神なき救濟の道を我々に示したのである。

佛教は其の中心教理に於て先づ經驗的なる現實世界の苦を離脱して、自主自由自律の生活を體驗せんことを教へるのである。即ち事物を如實に見ることによつて現實の世界は無常であり、無我であり、故に苦なりと斷定した佛陀は更に苦の滅したる理想の世界とそを實現すべき方法とを指示した。所謂滅道の一諦十二因縁の逆觀、八正道修禪等の教條は即ち是を指す。而して嚮に述べたる如く苦觀は佛陀の宗教に於ける出發點であるがそれには二つの特質を持つ。即ち(一)佛陀の所謂苦は苦樂の相對判断ではなく(二)又實在性にあらずして觀念性のものである。蓋し苦が若し樂の相對概念であるとすればそは我々の相對的なる感覺感情に基くものであつて苦の滅が直ちに心解脱、智解脱を意味する(苦樂を絶したる)絕對の涅槃には到達し得ないであらうし、又苦が若し實在的とすれば其を脱せんとするあらゆ

る努力精進は全く徒勞に終つてしまふからである。思ふにかゝる現實苦の主觀的なる根據を知的に言へば無明であり、情意的に見れば愛欲である。即ち無常なるが故に無我なる事實判断を價値的に見て苦なりと判断する因由は常住ならんことを要求し、それを主觀的に享受すべき我体あらんことを期する所の渴愛あるが爲である。故に(註四)經には、Janhāya niyati loko tanlāyo Parkissati tanhāya ekadhammassa sabbeva vasam anuagūti. ふ詰かれてゐる。かく論じ來らば佛教教理の朝宗するものは要するに一心である。故に苦と涅槃とは立場の相違であつて苦に即して涅槃が存するのである。苦の滅却が涅槃であるならば苦の根源たる愛欲の斷滅はそのまま涅槃の現成である。古來心淨故衆生淨、心染故衆生染と稱せらるるは染淨迷悟の如何は實に一心によるのであつて、心の變換が佛教の目とす所である。(註五)故に經には Nātakāmāñci citrāni loke sankapparāgo purissa kāmo, titthanti cit rānītāl-eva loke, Ath-etha dburā vinayauti Chandam. い說がれてゐる。從來(註六)世間を隱覆してゐた無明を明に轉換するとは慧解脫であり、衆生を縛縛する愛欲を慈悲に轉向する」とは心解脫である。なり乍らその解脫は我執に基く情意の否定であつて西歐の人々が往々にして誤解するやうな生命の當體を否定することでは勿論なし。生命の當體を否定する」とが若し佛教の理想であるならばンガウ・ンベーの誤つた如く佛教は純然たる厭世教であり、現實に生くる價值を認めざる死の宗教である。かくせば佛陀が從來の婆羅門教乃至六師外道等に對して決然たる轉向をなした根據が全く失はれるであらう。感覺に基く欲望の否定は直ちに以て聖なる光によつて照らるる理想世界の開展である。即ちそれは眞の價値を實現せんとする生活の現成である。從つて佛陀にあつては涅槃は學人の理想であると共にそを實現した

るもののが自主自律なる心の状態であつて形而上學的實在ではあり得ない。自主的なるが故に他に依據せず、依據せざるものに心の動搖はない。寂靜なるものの心は固より生滅去來は存しない。さり乍ら宗教の理想は單に空虚なる觀念であつてはならない。實踐を離れた抽象論は佛教にあり得ない。故に必ずそれは人生に生きた力と價値とを附與する人格的の現實體とならねばならない。即ち菩提を内容とせる生きた人格完成である。是を客觀的に觀察すれば法の究竟を體現した者と稱することが出来るであらう。佛陀は成道後 *Sabbābhīhu sabbāvidu' ham asmi.* と言はれたと傳へてゐる。蓋し一切勝者は無我執に基く一切の官能的欲望を調伏したる者を意味し一切智者は法に明かならざる一切の迷惑を斷滅した人格を指示する。ゼーデルブローンがいみじく表現した如く涅槃は實に神なき神の世界であり、贈り手なき神の贈與である。初より完成せる神には尊嚴性がない。何者もそこには自己克服の努力が存しないからである。粉骨碎身の努力によつて成り得た神人こそ眞に最高階位に於ける神である。それは所謂實在的な神では固よりないが神に比すべき世界の實現である。從來の大乘諸家は常樂我淨を涅槃の屬性とし是を無常苦、無我、染の相對觀念と考へるが併し茲には思索の缺乏に原因する多くの誤謬が存すると思ふ。現象界と本體界との區別を直ちに分離と思惟する人々は涅槃を常識的形而上學の世界に閉ぢ込めてしまふのである。

却說成道後佛陀は法輪を轉ぜんとして「いざ人々の中に行きて不滅への門戸を開かん。聴くべき耳を持てる人々に尊き教の道を示さん。」と宣言されたといふ。茲に言ふ、不滅への門、不死への道とは何ぞや。大乗家の立場より云へば佛陀の成道は生死流轉の世界を超えて永遠不滅の世界に入つた謂であらう。即ち永遠の生命を獲得したのである。永

遠なる概念は二つの意味を持つ。即ち時間的永續の無際限は其の一であり、現象的持続の持続の制限を超えたる無時間性は其の二である。佛教の説く永遠の生命にも亦この二義が存するが併し佛陀の涅槃は心に生滅流轉の時間性を滅却したる後者に屬する。有名なる偈(註六) *Anicca vata sankhā, uppavavaya abammino, uppajitvanirujjhanti, te sam vupasamo sukho.* は如實に右の消息を物語るものである。前者即ち生命の時間的永續は業思想を以て説くことが可能である。佛教の言ふ業は人間の行為が生命の流れに印する精神的力であり、意識の統一體に残された凡ての経験的印象である。(註七)それは存在にあらずして流轉であり、生と滅との断へざる進行である。(註八)故に業は生命であつて業以外に主體は存しない。けれども業による隔生輪廻の思想は發達佛教に於ては兎も角佛陀に於ては直接の關心事ではなかつた。従つてこれが精細なる研究は日下課せられたる問題にあらざるが故に他日に譲らうと思ふ。

かく考へ來らば根本佛教は基督教に於て中心問題たる神及び靈魂の觀念を全く棄てて而も力ある解脫救濟の宗教として史上に爛然たる足跡を印することを得たのである。

編輯者には永遠性の問題に關する研究を發表すべく約束したが紙數に甚だしき制限を受けてゐるので今は是を割愛する。

### 註

(1) Paul Gese; Einleitung in die Religious rhilosophie. S. 59

(11) Chandogya up. VI. 3. 2.

- (11) E. Hofmann; Die Grundgedanken des Buddhismus S.16
- (12) Samyutta-n. Vol I. 7. 4. Samyojana p. 39.
- (13) S. N. Vol. I. 4. 3. Na santi p. 22
- (14) 繼世傳聞 三十六
- (15) Mahaparinibbāna sutta. VI,
- (16) P. Dahlke; Ansaefze zum Verstaendnis des Buddhismus II. S. 9.